

文化 第七十九卷 第三・四号 一秋・冬一 別刷
平成二十八年三月二十五日発行

千種眞一教授の業績と学風

後
藤
齊



千種眞一教授の業績と学風

後藤 齊

東北大学大学院文学研究科言語科学専攻言語学専攻分野の千種眞一教授は二〇一六年三月末日をもって定年により退職される。ここに先生の長年にわたるお仕事振り返って、その学恩に報いたいと思う。

千種先生は一九五〇年、仙台市のお生まれである。宮城県仙台第二高等学校をへて、一九七〇年東北大学文学部に入学され、引き続き一九七四年に大学院に進学された。本学の言語学講座は一九六五年に発足していたが、当初は教育学部の長谷川松治教授が併任されていた。最初は教育学部の長谷川松治教授が併任されていた。一九七〇年に初めて専任の教員として朝鮮語学を専門とした中村完先生が助教として着任したのであった。したがって、千種先生は本学の言語学研究室がまさにその形を取り始めていたときに研究室に入られたことになる。

東京教育大学で河野六郎先生の薫陶を受けられた中

村先生は、朝鮮語学を教授されるとともに、新しい研究室にオーソドックスな言語学を研究する雰囲気を作成しようとしておられた。それを補う形で、ロシア語の助教として文学部に在職していた沓掛良彦先生も言語学の授業を担当され、ホメロス叙事詩の講読などを指導された。

千種先生はそのような環境において、インド・ヨーロッパ語学を対象とした歴史言語学の道に進むことを志された。言語学は、十八世紀から十九世紀にかけて、古くからあった文法研究や文献学の流れを汲みながら近代的な学問へと転換を遂げるが、それはまさにインド・ヨーロッパ比較言語学が成立する過程を通してのことであった。日本における言語学の発展もその深い影響の下に展開された。

さて、インド・ヨーロッパ語学の研究を本格的に行

うためには、研究者の側に高い素養が要求される。主要なインド・ヨーロッパ語のいくつか（ギリシャ語、ラテン語、サンスクリット等）についての知識が不可欠であり、さらに、研究書を読むための英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語等の現代ヨーロッパ諸言語にも通じている必要があるためである。

千種先生はそのような条件を承知の上で、この分野の研究に果敢に挑戦されたのであった。卒業論文「原始印欧語の複合語」においてすでにその片鱗を示し、修士論文「原始印欧語の文構造」では統辞法へと関心を集中させている。大学院時代を通じて研鑽を続けられ、一九七八年から一九八二年には中村先生（一九八一年に教授昇任）の下で研究室の助手を勤められた。

一九八二年には山形大学教養部講師の職を得て、主として工学部キャンパスでの英語の授業を担当された。ここで助教授に昇任されるが、一九八六年、東北大学文学部言語学講座助教授として中村教授の下に戻られることになった。教授・助教授の定員が充足して、名実ともに一人前の講座となった言語学研究室において、千種先生はご自身の研究と学生への教育に存分に力を発揮される。

ほどなくして一九八八年、言語学研究室は国語学研

究室および新設の日本語教育学研究室とともに、それぞれ二講座編制となつたうえで、新たに日本語学科を構成することとなった。現在の研究棟が新築されて、文学部棟から移転し、続けて二つ目の講座の教授として平野日出征先生が着任する。さらに二〇〇〇年には大学院重点化に伴い、大学院文学研究科言語科学専攻言語学専攻分野に衣替えする。そのように研究教育環境がめまぐるしく変化する中、千種先生は着実に業績を重ねられ、一九九八年に教授に昇進された。

平野教授は研究室の運営に手腕を振られたが、二〇〇一年十二月に現職のまま急逝され、このため千種先生は突然言語学研究室の主任としての責任を負うことになった。心の準備はまだおありでなかったであろうが、その後しばらくの間その任務を一人で務められねばならなかった。その間、なにかと苦勞も多かったものと拝察するが、千種先生はそのようなことをあまり外には見せずに務められた。

千種先生のご専門は一貫してインド・ヨーロッパ語学であるが、振りかえってその業績を見れば、中核をなしているのは次の4点の著書・編著書である。すなわち、『ゴート語の聖書』（大学書林、一九八九）、『ゴート語辞典』（大学書林、一九九七）、『古典アルメニア語文法』（大学書林、二〇〇一）、『古典アルメ

語辞典』(大学書林、二〇一三)。

最初の著書『ゴート語の聖書』は、まえがきによれば「ゴート語を初めて学ぼうとする方々のために書かれた」となっているが、単なる入門書ではない。読者は、まずこの言語と資料の性質についての案内を受けて、さらに文法を概観したのち、新約聖書の翻訳であるテキストの読解へと誘われる。そこで特徴的なことは、ギリシャ語テキストとの対訳になっており、豊富な脚注においても主としてギリシャ語との対比が詳述されていることである。

ゴート語はゲルマン語派のうちでもっとも古い文献を有する言語として、英語やドイツ語などゲルマン諸語の研究者の関心も高い。また、現存するテキストは四世紀に由来する新約聖書翻訳にほぼ限定されている。ゴート語テキストの性質と日本における想定される中心的読者層とを十分に考慮に入れた結果として、この本は、欧米におけるこの言語の概説書の伝統的な記述を踏まえながらも、独自の構成となっているのである。ギリシャ語、ラテン語、サンスクリットなど、オリジナルな文献を豊富に有する古典語とは異なっており、ゴート語では翻訳の手法という問題に直面せざるをえないのであり、千種先生にとってこの事実はゴート語に対する重要な視点を構成している。

『ゴート語辞典』は七六七ページを数える大冊である。ゴート語の聖書翻訳テキストに現れる語彙を網羅的に収録したもので、多くの用例を引用しつつ、とりわけ基本語にはページを費やして詳細な解説が施されている。ギリシャ語との対応も解説の重要な部分となしている点は、ここでも千種先生の見識の現れである。例文には日本語訳も添えられており、日本語の索引もあって、この言語の全体像を概観するのに好適な資料となっている。

ゴート語に関する二冊の著書・編著書を物されたのち、先生の研究上の関心はアルメニア語に向かった。比較的近い時代に聖書の翻訳という形で文献にその姿を現したという、これら二つの言語の類似性による。一方、それほど多くない文献を残すだけで死語となってしまったゴート語に対して、アルメニア語の歴史は現代に続いている。その間に、アルメニア語はペルシャ語など周辺の言語から甚大な影響を蒙っており、言語接触、言語類型論の観点からも興味深い現象が多い。アルメニア語に着目したことにより、千種先生の研究はさらなる視座を獲得することになった。

アルメニア語は、インド・ヨーロッパ諸語の中で独特な位置にあり、長いヨーロッパのインド・ヨーロッパ研究の歴史の中でも焦点を当てられることが少な

かった言語である。日本において先行する書籍が皆無であったわけではないが、『古典アルメニア語文法』に結実する千種先生の研究は画期的なものであったと言つてよい。

ページ数と文字サイズを勘案すれば『ゴート語の聖書』の二倍以上の記述量をもつこの本は、五世紀ごろの古典アルメニア語の全体像をよく伝える構成になっている。インド・ヨーロッパ祖語からアルメニア語に至る音韻変化の解説は語構成や形態論の章も詳しいが、この本をもっともよく際立たせ、特徴づけているのは一〇〇ページに近い統語論の章であつて、千種先生の関心の深化をよく現している。

『古典アルメニア語辞典』（大学書林、二〇一三）も七七七ページの大作である。紀元五世紀前半の新約聖書の翻訳に現れた語彙を網羅的に収録している。ここでも基本語の解説は詳しく、語義区分や生起環境ごとに文法・語義・本文等に関する情報が添えられている。もちろんギリシャ語との対応も示されており、ギリシャ語文と対比されている用例も少なくない。

千種先生の論文や科研費報告書のうち多数は、当然のことながら、インド・ヨーロッパ語の歴史言語学を軸に据えたものである。これは特に初期の論考において顕著に見られる。「初期印欧語における不定詞と格機

能について」（一九七九）、「初期印欧語の文結合辞と若干の関連形態について」（一九八〇）、「チコバーヴァ歴史主義考」（一九八一）などである。のちには、上記の著書と関連する形で、ゴート語とアルメニア語における統語論や翻訳手法をあつかった一連の論考を公刊されておられることも言うまでもない。

しかし、千種先生の歴史研究がさらなる視野の広がりを示していることも注目される。歴史言語学への言語類型論の貢献の可能性についてはつとにR.ヤコブソンが論じていたところであるが、西欧語圏のみならずロシア語圏における言語類型論研究にも造詣の深い千種先生にとって、歴史言語学における言語類型論の援用を志向されたのも自然な成り行きであつたのであろう。「印欧語曲用の類型的再建について」（一九八五）、「印欧語における文構造と動格性」（一九九一）、「印欧語における人称代名詞と動格性」（一九九六）などに示されているように、言語類型論を援用することで歴史言語学を豊かなものにされたのである。

また、千種先生は文字についても独自の視点を示された。「文字の類型的分類と日本文字の表記体系」（二〇〇七）、「常用漢字の認知文字論的考察・認知情報単位の類型と分布」（二〇〇八）などである。文字論

は西洋の言語学の伝統の中で軽視されていた分野であるが、河野六郎先生はその認識を改めるべきことを説かれ、中村先生もその考えを受け継いでおられた。千種先生はさらに包括的な文字論を試みておられる。

ほかに、千種先生が文学研究科内でのつながりから、何炳棣著、寺田隆信・千種真一訳『科学と近世中国社会・立身出世の階梯』（平凡社、一九九三）の翻訳に加われ、『食に見る世界の文化』（東北大学出版会、二〇〇七）の編集に携わられたことにも触れておこう。

ゴート語および古典アルメニア語という、インド・ヨーロッパ語の中でも、比較的特殊性の高い言語を対象にして、文法とテキストおよび辞典という基本的な資料を、高いレベルにおいて公開されたことは、日本のインド・ヨーロッパ語研究、ひいては言語研究全体に大きく貢献するものである。しかも入手しやすい形で出版されたことは研究者の裾野を広げることにつながり、後学に裨益するところが大きい。千種先生は、意味分類によるシンソーラス型の辞典の作成を魅力的な課題として構想されておられたが、具体的な実現は後学の責務として遺されたことになるのであろう。

千種先生は、二〇一〇年末ごろから具体化した日本歴史言語学会設立の動きにその準備の段階から加わら

れ、二〇一一年の創立にあたって、後藤敏文会長（当時本研究所インド学仏教史専攻分野教授）の下、副会長に推されられた。二〇一四年には、本学で開催された大会において、後藤初代会長の後を襲う二代目の会長に就任された。

言語の歴史的研究は言語学の中で伝統ある分野ではあるが、現代の言語学が多様な理論とアプローチを展開している中で必ずしも目立った位置づけにはない。会長たる千種先生は、ご自身が言語類型論などからも多くの着想を得られたように、現代言語学の成果を貪欲に取り入れた形で歴史言語学がさらに発展することに意を尽くしつつ、その任にあたられたようにお見受けする。

言語学研究室に来る留学生の多くは日本語を専門にしているので、千種先生の専門領域と近いとは言えない者がほとんどである。千種先生は、しかし、そのような留学生も積極的に受け入れ、指導に尽くされた。そのうちの何人かとは帰国後も深く長い交流を続けておられ、時に講演や講義に招待されることもあった。先生のお人柄をよく物語っている。

先生は、話術に長けておられる。さまざまな話題を提供され、時に飄々と、また時に辛辣に、あるいはシニカルにコメントされては、酒席を盛り上げるのが常

であった。年の離れた学生にも気軽に声をかけておられた。

千種先生は無類の温泉好きでもあられる。旅行も好きであって、東北地方はもとより全国各地の温泉を巡らされている。ご退職後も後進の指導になおしばらくの間は携わられることもあるが、早晚その任から解放されることになろう。その暁には、いっそう健康に留意されて、温泉巡りなどで悠々自適の生活をお楽しみいただくことを願っている。